**№54　テーマ『成功への鉄則』前半**

**講話日2012年7月9日**

**皆さんこんにちは。今日は素晴らしい晴天になって、雲ひとつない青空で気持ちが良いですね。梅雨の最中でなんとなくちょっと蒸し暑いですけども。今年も夏は暑くなるかもしれませんので、皆さん方もどうぞ健康に気をつけて頑張ってください。今日のテーマですが、成功への鉄則にしたんですけど。自己実現の人生というものを本当に自分が納得できる成功と言える、結果に結びつけていくためには、どういう原則を踏んで生きなければならないか、というのが今日のテーマであります。私の感性論哲学では、人生は意志と愛のドラマという基本原理で考えていくわけですけども、人生の目的は意志を実現し、愛を実現することである。意志を実現するとは自己を実現することである、また愛を実現するとは素晴らしい人間関係をたくさんつくっていくということである。人間における本当の幸せは、仕事において成功し、素晴らしい人間関係をたくさんつくっていくということを原理にして、人生の幸せというのは成り立つものだと。幸せという実感は命から湧いてくるものですけども、人間という命の基本的な目的は、自己実現を通して仕事に成功して、そして素晴らしい人間関係をたくさんつくっていくということが人間の命の欲求なんですよね。命の欲求を満たす、満足させることによって命は満足して幸せだなぁという気持ちになれる、というのが幸福論の基本原理であります。今日はその中で意志を実現する、すなわち自己実現の人生というものを歩んでいくことによって、どういう風にしたら確実に成功と言える結果をつくり出すことができるのか。その生き方の方法論というものを今日はお話をするわけであります。それが成功への鉄則、あるいは別の言葉で言うと生き方の鉄則とも言えます。とにかく、結果として成功を手に入れるためにはどうしたら良いのかということです。全部でその原理が五つありますので、それを順次お話をしていきたいと思います。**

**まず第一番目ですけども、人生の舞台は社会だ。社会の中で仕事をして生きて、成功という結果を出そうと思ったら何が一番大事なのか。社会の中で生きていく上で基本的に大事なことは、他人から信頼され、信用されるということ。他人から信頼され、信用されなければ何事も成功しない。うまくいくはずがない。他人から信頼され、信用されるために自らが成さなければならない努力は、自信をつくるということなんですね。他人から信頼され、信用されるために他人に媚びへつらって、他人の意識に従うというのは、人間としてはあまり良くない生き方であって、他人から信頼され、信用されるために自らがなさなければならない努力は、自分自身の生きる力をつくっていく。そのことによって他人から信頼され、信用されるという結果に結びつけていくということなのであって、社会において要求される信頼・信用されるというものを獲得するためには、まずは自信をつくる。信じるに足る自己をつくる。信じることができる自分。そういう努力をする必要があるわけであります。だけども、社会の現実は自信だけでは生きていけない。自信だけでは自信過剰になっちゃったりなんかしちゃったりして、自信だけでは生きられない。自信過剰が他人から嫌われて傲慢になってしまって、対立を呼び起こしてしまったり、あるいは内部告発を受けたり、そういうことになってしまう。自信だけでは生きられない。自信と必ずその裏と表で一対となっていなければならないものが、謙虚さである。よく謙虚さが大事だと言われるんですけども、謙虚さだけでも生きられない。謙虚、謙虚、謙虚、謙虚と、なんとなく鳥が鳴いているみたいですかね。謙虚さだけでも生きられない。それだけでは弱さ、媚びへつらいになる。自信と謙虚さは一対のものとして獲得されて初めてこれが社会を生きる実力、社会を生きる力ということができるわけであります。第一番目の成功の鉄則として考えなければならんことは、自信と謙虚さというものをどう身につけるかということです。**

**このことなしには、いかなる目的もいかなる理想も達成することはできない。そこでまずはどうすれば信じるに足る自己をつくれるという自信が、命から湧いてくるという状態になれるのか。そのことからまず考えていくわけです。どうしたら本当の自信、現実を生き抜く自信、崩れることのない自信を自分のものにすることができるのか。それを考える必要があります。自信というものは命から湧いてくるものですので、命から湧いてくるものというのは、命を構成する各要素が有機的に絡み合って、その相乗効果として命から湧いてくるということができるわけです。**

**そういう意味では、自信というものも命のいろんな要素が絡み合って、その相乗効果として湧いてくるものが自分の自信の内容であり、またレベルである。そのように考えていくと、人間というものを構成する要素、原理というのは理性・感性・肉体。人間を構成する要素は、理性・感性・肉体という三つの要素が絡み合って、人間という命はできているんだ。と考えていくと、我々は命から自信というものが湧いてくる状態にしようと思ったならば、まずその理性という観点から自信をつくるためにはどうするかということを考える。次には、感性という観点から自信をつくるためにはどうするかを考える。肉体という観点から自信をつくるにはどうするかを考える。三つの人間を構成する要素というものを原理にして、どのようにして自分の自信というものをつくり上げるか。それを考えていく。これが体系的に自信というものをつくっていく方法論であります。**

**そこでまず理性という観点から自信をつくろうと思ったらどうしたら良いのか、といったら、理性という観点から自信をつけるためには、学問的知識を求めていかなければならない。ついつい学校を出て、社会に出て就職してしまうと。多くの人が学問との関係性を忘れてしまって、自分の経験・体験に基づくものだけで仕事をしてしまうことになってしまいやすい。体験・経験というのは、個の限界を超え難い。体験・経験というのは個人的なもの、自分だけのもの。体験・経験に基づく自信だけでは多くの人から信用を獲得する、信頼を得るということは難しいわけであります。体験・経験というのは個人的なものだ。体験・経験に基づく自信というのも大事なんだけど、体験・経験の自信だけでは個の限界を超え難い。そこでまず多くの人から信頼され、信用されるという結果を得るためには、学問的知識を求めていく努力をする必要がある。なぜ学問的知識を求めていかなければならないのか。その時代に生きる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという客観的根拠が、明確に与えられているもの=学問的知識。であるがゆえに、誰もがそうだと認めなければならない根拠が、明確に与えられる学問的知識をどれだけ自分が身につけているか。これこそまさに多くの人から信頼され、信用されるということになる…非常に大事な事柄と考えなければなりません。まずは自分の今やっている仕事に関わる学問的知識をとことん追求していく。そういう努力が必要であります。**

**プロというのは、お客さんと、一般の人たちから「さすが」と言われて初めてプロなんですよね。普通の一般の人に「さすが」と言われないような力で仕事をして、金を取るようなことはおこがましい。金を取るからには、惜しみなく相手が金を払うことができるような力を相手に示さなければならない。そのためやっぱりプロの資格の大事なものとしてお客さんに「さすが」と言わせる何かを持っていなければならない。「さすがですね。これだけのことをしてくれたんだから、これくらいの金は当然」と、気持ち良く、機嫌良く相手がお金を払ってくれる。それで初めてプロの仕事となるわけです。そういう意味でも我々は、自分の仕事に関わる学問的知識というものをとことん追求していく努力を、現役で仕事をしている間は一生続けなければならない。知識もやっぱり日進月歩で進歩します。知識の中には技術も入っているわけです。知識・技術は日進月歩で進歩する。それをどんどん自分の中に取り入れていって、そしてこの時代において考えることができる最高の技術・力で、お客さんに対応する。今、この時代における最高の力で仕事をする。それがプロとしての仕事の仕方の誇りと言うことができるもんだと思います。**

**なかなかそうは言っても、時代の最先端の学問的知識というものを常に自分が持っているということは、なかなか努力しても難しいことかもしれませんが、とにかく目標として今の自分のやっている仕事における、今の世界の最高水準と言えるものを常に、自分の意識の中に置いて、それを求めてその力でお客さんに対応する。そのことによってお客さんからの絶大な信頼・信用が獲得できることになってくるわけであります。とにかく理性という観点から崩れようのない自信をつくっていこうと思ったならば、今自分がやっている仕事に関わる学問的知識をとことん求めていく努力をする以外にない。もちろん体験・経験も大事なんですけども、体験・経験に基づく自信というものを学問的知識、学問的な根拠というものの上に、自分の体験・経験を立脚させる。そういうことによって、実践的な自信がつくられていくんだということです。とにかく、体験・経験に基づく自信は個の限界を超え難い。人から信頼され、信用されるのは難しいということ。よくテレビなんかで、いろんな人が出てきて話をするんですけども、普通の人が出てきて話をすると「そうかも」「そうかもしれないね」というぐらいの聞き方なんですけど、大学の先生が出てきて「こうなんです」と言うと、「そうなんだ」と思ってしまって、無条件で信じてしまう。そうなる場合が多いわけです。それほどに学問的知識というものは、有無を言わせない、信頼・信用を獲得できる力がある。そういう意味で、是非仕事に関わる学問的知識というものをできるだけ求めていく。そういう努力も社会に出て、仕事をし始めてもやり続けることが必要であります。学問との関連性を忘れては、自分自身の社会的な価値というものを本当に維持し、発展させることは難しい、ということを常に頭に置いてもらいたいと思います。**

**次は、今度感性という観点から自信をつくるための方法論です。感性は感じるものですけども、人間における感性というのは心と言われるところまで発展・進化してきている。感性というものは、すべての生物が生きるための基本的な力として持っているもの。感性というものも人間においては、心と言われる水準にまで発展・進化している。心とは何なのか。心というのは意味と価値を感じる感性である。人間は意味を感じないと、やる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。人生は感じてこそ人生だ、燃えてこそ人生だ。人間の本質と言われる心というのは、意味と価値を感じる感性である。意味と価値を感じる感性というものを原理にして、自信をつくるとはどういうことなのか。人間は本当に最高に意味や価値を感じるという状態になると、必ず「俺はこのためなら死んでもいい」という思いになる。人間の最も命が燃え上がった状態、活かされている状態というのは、死んでもいいとなることが命が最も輝いている状態なんですね。こういう心の在り方を原理にして、自信をつくるとはどういうことなのか。そういう目標は、自分の生き方を支える信念を持つということなんです。信念というものは動揺しないこと。誰かに何かを言われてぐらついているようでは、まだその信念は固まっていないということ。**

**少々のことで崩れない、動揺しない、ブレない信念というのは、どうしたらできるのか。そのために求められるものは、死んでもいいという気持ち。そういうことになってくれば、その信念はいかなることがあっても崩れることがない。そういう状態になって初めて、それは本当の信念とも言えるわけであります。信念を持って生きるという状態になるためには、何らかの意味で死んでもいいと思えるものを持たなければならない。この仕事のためだったら俺は死ねるという仕事の仕方をしようと思ったら、今自分のやっている仕事の中に、このためなら命を懸けてもいいと思える何かを見いだす必要がある。人間の生き方としては、死んでもいいと思えるものを持って生きる以上の生き方はないんですよ。よくマイフィロソフィーという言い方をしますけど、「これが俺の哲学や」というのは、信念を持って生きている人間の姿なんですね。これが哲学における最高の段階であります。死んだらおしまいですから、であるがゆえに死んでもいいと思って生きる以上の生き方はないということです。人間というのは、このためなら死んでもいいと思える思いで生きている姿を見て感動するわけですよ。命を懸けてもいいという思いで仕事している姿を見て、お客さんは感動してくれる。人に感動を与えるためには、命を懸ける生き様が最終的には求められることになります。よくあの棟方志功さんが版画を彫っている、彫っている姿というのは、あれは本当にもう神の領域というか、一心不乱で彫刻三昧、本当にその世界に浸りきってあらゆることを忘れて、本当に今自分のやっていることに浸りきった状態になっている。そこに人は神々しさを感じて、その版画に感動するわけです。とにかくそういう一心不乱になって仕事に打ち込んでいる姿をお客さんに見せるのは大事なこと。そのことによってお客さんは、その人を信頼・信用して、「この人に任せておこう」という気持ちになってくれるわけです。だいたい家を建てている現場において、その家を建てるために一生懸命に真剣に仕事をしてくれている職人さんたちの姿を施主が見ると、本当に手を合わせたいぐらいに感動しちゃって、本当に心から嬉しいし、幸せを感じてくれるということになってくるわけです。それほどにやっぱり施主さんに感動させて喜ばせるほどの仕事の仕方を見せないといけないと思います。今自分のやっている仕事もなんとか三昧になる、命を懸ける仕事の仕方というものを我々は志さなければならない。そのようにして社会的な信頼・信用というものは、その人に与えられるし、またそういう仕事をしている社員がいる会社は、その現場において多くの人から高い信用を獲得して、発展していくわけであります。**

**そういう意味で、感性という観点から崩れようのない自信をつくっていこうと思ったら、今自分のやっている仕事の中に何かしら「このためなら俺は死ねる」「このことになら命を懸けても本望だ」と言えるようなものを何かしら持たなければならない。どんな仕事でも他の仕事にはない、独特の魅力、独特の価値というものを持ってますので、今自分のやっている仕事の意味や価値を追求していったら、どんな仕事でも最終的には「この仕事のためなら死ねる」という気持ちになることができる。社会的に価値あるものとして存在する職業というものの最終的な姿であります。そこでプロならば、お客さんを感動させるような仕事の姿勢を身につけていかなければならない。これが信頼・信用を獲得する感性を原理にしたやり方です。**

**次は肉体、肉体という観点から崩れようのない信頼・信用を獲得するとはどういうことなのか。肉体が持っている人間的価値とは、体験である。体験は肉体がなかったらできません。体験こそ肉体の人間的意味であり、人間的価値である。では、体験とは何なのか。体験というのは、真実を語る力だ。体験なしには真実を語れない。体験がなくっても真理は語れますが、体験なしには真実を語れない。病気になった人間にしかその病気の真実を語れない。やった人間にしかわからない、それが体験。しかも肉体こそ人間における実力というものをつくってくれる大事な原理だ。だから、本当にいろいろなことを自分のものにしたときに体得したと言うんですね。肉体がそれを憶えて、身につけて初めて本当に身についた、実力になった言えるわけです。体得、肉化するとよく言いますけど、肉化とは命で何かを獲得するということ、それが体得と言えるものです。それほどに肉体は人間の人生に重要な価値を持っています。これまでは肉体の重要性というのをあまり語らずに、むしろ理性だけが大事な能力のようにこう言われてきてしまった経緯があります。だけども、我々は本当に実力を持って人生を生きていこうと思ったならば、あらゆるものを肉化しなければならない。肉体に収めることが実力を自分のものにすることだ。体得しなければならない。体験することによって我々はあらゆることの真実を知ることができる。真実を語る力を持つことができる。その意味においては、あらゆる体験はそのことの真実を分からせてくれるという働きをしておりますので、体験にはマイナスがない。体験はやった人間にしかわからんというものを与えてくれるんですから、どんなことでも体験から真実を掴み取ることができる。その意味では、体験にはマイナスがない。人生はまさに体験の積み重ねだ。朝起きてから寝るまでずっと体験の連続だ。体験の積み重ねが自分の実力だ。体験にはマイナスがない。体験の数だけ成長できる。体験によって本当の自信、真実を知る、語るという…本当の納得できる力を体験によって獲得できる。命に痛みを感じる体験というものが、実力をつくってくれる。命に痛みを感じる体験というのは失敗をしたり、スランプに陥ったり、悩みを持ったり、辛いことにぶち当たったり。「本当にもう生きているより死んだほうがまし」と思うような人生の地獄を味わうという体験を積み、地獄の状態から這い上がって来ることによって、人間は本当の社会を生きる力というのをものにすると、こう言われているわけです。**

**よく経済社会で言われるんですけど、経営者が経営者として本物になるためには三つの中のいずれかを体験しなければならないと言われております。倒産か大病か投獄。会社を潰してしまうか、あるいは生死をさまよう大病をする、牢屋にぶち込まれるか。この三つのうちのいずれかを体験しなければ、経営者として人間的に本物にはならないと言われるんですよ。実際には別にそんなことは体験しなくていいんですけども、だけどそれに匹敵するほどの命の痛みを体験しないと、人間にどしょっぽね（土性骨）が入らない。人間に筋金が入らない。本当の生きる真剣さというものを身につけることはできない。だから人間として本物になるためには、そういう地獄を見るということが非常に大事な体験と言われているわけであります。そういうところから這い上がってきた人間だけが、誰もを納得させる実力を身につけることができるんだ。これが他人から信頼され、信用されるという結果に結びついていく。体験にはマイナスがない。でも実際は、「これは失敗だったな」とか言って、自分にとってはそれはマイナスだと思ってしまって、失敗の体験によって自信をなくす。あるいは挫折を感じることになってしまう方もいらっしゃるんですけども。人生において大事なことは、自分の体験をどのように自分の成長に結びつけていくか。体験をどのように活かして全てをプラスにしていくか、ということが人生を生きる上で非常に大事な方法論です。自分の身の回りに起こるでき事、自分の体験を「良かった」と思ったら、物事は良い方向に展開していく。だけど「これは自分にとってマイナス」「これは失敗しちゃった」「ダメだな」と思ったら、だんだんダメになってしまって、自信がなくなるんですよ。自分の身の回りのこと全て「自分にとって良かった」「ありがたい」と思う気持ちで体験を自分が受け止めていくならば、全ての体験は自分に生きる力を与えてくれて、成功や幸せに自分を導いてくれる。人生は解釈一つで180度展開が違ってくるんだ。解釈力というのは大事な力であります。**

**解釈力のことを哲学力とも言います。あらゆることを自分の人生のプラスにする。「病気にさせてもらって良かった」とか、この病気のおかげで人生の重大な問題に気づけた…のように、あらゆることから成長する気付きを掴み取る。そういうことをしていかなければならない。失敗をしてダメだと思わずに、失敗は成功の源だと思い、不完全な人間にとって避けがたい重要な体験であると思う。失敗を恐れてはならない。失敗を通して、失敗をしてしまった人間の気持ちをわかってあげられる人間に、自分も成長することができる。また失敗というものが、だんだんだんだん自分の考え方ややり方を成長させてくれる。失敗の積み重ねが必ずうまくいったという成功に導いてくれる。失敗は成功の確率を増やす。たくさん失敗することによって、一歩一歩、もうちょっとで成功かも、とだんだん幅を狭めていく、成功に近づいているんだという解釈をしなければなりません。失敗は成功の確率を増やす。失敗しても決して自信をなくすのではなく、もうちょっとで成功かも知れんという思いで、成功するまでやめない。この努力が失敗を活かす生き方であります。あらゆる問題や悩みというのは、自分を成長させるために出てくるんだ。問題にぶつかり、悩みにぶつかって悲観してはならない。問題や悩みは、自分を成長させるために出てくる、会社・社会を発展させるために出てくる。この全ての現象を自分が成長するために使っていく、自分にとって良かったと解釈する、それが解釈力の妙と言えるものです。問題と悩みがなければ成長しない。問題と悩みがなければ、今のままでいいとなりますから成長はしない。**

**よく昔から「万象是我師」と言って、あらゆる現象は=万象。あらゆる現象は、自分にとって先生と言えるもんだ。あらゆる現象は、何かを自分に教えよう、自分に何かを気づかせよう、何かを伝えようとして起こっている。無意味な現象は存在しない。病気も失敗も、どんなことでも皆、それは自分を成長させるために起こっている現象なんだ。自分の身の回りに起こるすべてのことから、何かを学んで、何かを掴んで、何かに気づいて自分が成長していく。そういう生き方を覚えないといけません。そういう力を持ってくると、いろんな場面で他人から尊敬されたり、あるいは信頼されたりという結果が自分に備わってきます。崩れようのない自信、他人から信頼され、信用されるという力を自分につくっていこうと思ったならば、理性という観点からは学問的知識。感性という観点からは信念。死んでもいいと思えるものを持つということ。肉体という観点からは体験。体験にはマイナスがない。この三つを積み重ねて自信をつくっていく。学問的知識の積み重ねもこれも崩れない。また今自分のやっている仕事の意味を深掘りして、新しい意味や価値がわかってくるという努力も積み重ねであって、崩れようがない。また体験の積み重ねも人生は体験の連続ですから、崩れようがない。この三つが崩れようのない自信をつくっていく原理であって、我々は他人から信頼され、信用されるという結果を持つことができるんだ。自分の命から湧いてくる自信というのは、理性という観点からの学問的知識の積み重ねがどの程度できているか、感性という観点からの死んでもいいと思えるほどの意味や価値を感じる力がどの程度できているか、また体験というものを全て自分の人生に活かすという力がどの程度できているか、そのでき具合によって、自分の命から湧いてくる自信のレベルが決まることになってくる。とにかく自信というものを学問的な体系として考えた場合、今申し上げたようなことが言えるわけであります。是非参考にしてもらって、関わる人たちに「さすが」と言われる何かを持ったプロになってもらいたい。職業人であるならば、全ての人はこのことを目指さなければならないんですよ。お客さんに「さすが」と言われないような半端な力で金を取るのはおこがましい。納得して金を出してもらおうと思ったら、自分の仕事の中で何かしらお客さんに「さすが」と思わせるものを示さなかったら、プロとしては恥ずかしい。堂々と金は取れんということを是非考えておいてもらいたいと思います。**

**自信だけでは自信過剰になってしまう。傲慢になったら人間であることが根底から失格となる。人間にとって傲慢さほどおそろしいものはない。傲慢さほど醜いものはない。自信と一対であるべきものは、謙虚さである。謙虚さはどのようにしたらできるのか。謙虚さも湧いてくるもの。謙虚にしなくちゃと思っている間は、まだそれは謙虚さが身についてない、本当に身について体得されたら、湧いてくる。湧いてくる状態に持っていこうと思ったら、どういう努力をしたら良いか。そのためには基本的に不完全性の自覚を持ってなければならない。あらゆる場面において人間は不完全だということをちゃんとわかっていること。これが大事なんですよね。自分が正しいと思っていても、それは不完全であって、自分の考えがどんなに正しいと思っても、それは不完全であって偏見なんだ。偏りがある。そういうことが常に自分の中にあるかどうか。不完全性の自覚を持っている必要がある。不完全性の自覚を本当に意識ではなく、肉体にまで落とし込んで、肉化させて謙虚さが命からにじみ出てくるという状態にするにはどうするか。意識している段階は、まだ金儲けのための飾りになっている。飾りじゃないのよ涙は、ですからね。中森明菜と申しましょうか。本物はやっぱり命から湧いてくる。そういう状態になって初めて身についたと言える。どうしたら不完全性の自覚というものが体得されて、そして傲慢にはなれない、謙虚さというものが湧いてくるか。**

**そのための原理が二つあります。**

**一番目は、人間は誰でも長所半分短所半分という構造で人間性を持っている。どんな立派な人間でも必ず他人から非難され、他人から軽蔑され、他人に嫌われるところを50%は持っている。また、どんな落ちぶれた人間でも可能性としては、他人より優れたところを半分は持っているんだ。これが人間性というものの基本的な構造である。長所も短所もなくならない。なぜ人間は長所短所が半分ずつだと言えるのか。これは人間も大宇宙の一部を占める存在である。我々一人ひとりも宇宙なんだ。では、宇宙とはなんなのか。これはプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、そのエネルギーが協力をしながらバランスを模索して宇宙の秩序をつくっているのが、基本的な姿であって、それを宇宙の摂理と言います。バランスをとって、あらゆるものをつくっていくというのが宇宙の在り方がなんですね。そういう力で宇宙は万物をクリエイトしましたから、だから基本的に宇宙の構造は、バランス作用、平衡作用、調和作用。相反する対立し合う原理があって、一対となる。陰には陽があるし、また光には影があるし、善には悪があるし、美には醜があるし、真には偽があるし、清には濁があるし、男には女、動物には植物、表には裏。全部一対という対構造で宇宙は出来上がっている。人間には長所と短所がある…これは人間が命をつくったわけではなく、生まれながらに長所も短所も与えられている。だから、それぞれが半分ずつあると、我々は考えなければならない。そして、長所も短所もなくならない。短所がなくなったら、何が長所かわからなくなってしまう。長所がなくなったら、何が短所かわからなくなってしまう。長所も短所もお互いを支え合うものとして、半分ずつ存在する。そういうことを理解することから始まるわけです。**

**本当に謙虚さが滲み出てくる状態にしていこうと思ったら、その次に我々は短所についていろいろ考えなければならない。これまでは短所をなくしましょうと言ってきたんだけど、短所がなくなったら人間ではない。短所がなくなったら神様だ。人間は短所がなければならない。これは新しい人間観として受け止めて、受け入れていかなければならない重要な認識なんですね。短所がなければ人間ではない。人間には短所がなければならない。だから短所をなくす努力はしてはならない。短所をなくさせる努力もしてはならない。短所をなくす努力をしても短所はなくならないんだから、なくならない短所をなくす努力をするほど無駄なことはない。短所をなくす努力をしている時間があったら、長所を伸ばすために全部振り向けなければならない。短所が目立つ人間は、長所が伸びてないから。長所が伸びてきて、その長所が他人から一目置かれるほどの価値をもてば、短所はあまり気にならなくなり、短所は人間の味に変わる。「あんな凄い力を持っていても、こんなところもあって面白いね」「なんか親しみを感じるよね」となる。長所を伸ばせば短所は人間の味に変わる。人間味になってくる。長所を伸ばさないから短所が目立って非難されるんだ。短所の目立つ人は、その人の良いところを伸ばしてあげる。その人のいいところを使ってあげて仕事をさせてあげる。そういう努力をして長所が伸びてくれば、必ず短所は人間味、ご愛敬と言うか。長所が他人から一目置かれるような存在感のあるものになってきて、人間の味に変わる状態を角熟と言います。普通は円熟と言って、真ん丸になることを目指すんですけども、円熟では個性がなくなってしまう。あんまり面白くない。だけど人間には個性がある。欠けているところがあったり、角ばっている。個性を磨いていくためには、我々は円熟を目指してはならない。角熟を目指すべき。角ばったまんま、そのまんま東と申しましょうか。さんまのまんまで熟している。角熟こそ個性の時代の人間の目標だ。角熟していこうと思ったらどうするか。長所をとことん伸ばして、一時も早く他人から一目置かれる素晴らしい能力をつくる。そうすれば、短所は放っておいても人間味になる。だけど、短所はなくなるものではない。でも、それがあることで親しみを感じたり、人間として評価されるようなことになるのが、角熟という状態であります。とは言え、短所が出てくると嫌われてしまう。出てこないように注意をしなければならない。短所が出てしまった場合は、素直に謝る。そのことをしなければならない。言い訳をしてはいけない。**

**人の短所を発見したら責めるのではなく、助けてあげよう、助けてあげたい、助けてあげなくっちゃ、何とかしてあげたいという思いを持つことが、血の通った温かな心のある証明であって、人の短所を責める人には血の通った温かな心は存在しない。人の短所を責めるのは理性だ。理性は人間に完全性を要求する。だから短所は許さない。短所がなくなったら人間ではない。そういう意味で短所をなくす努力はさせないで、短所を補ってあげる。そういうパートナーシップを組ませてあげて、そしてある人の長所で、ある人の短所を補う…そういう人間関係、仕事上のパートナーシップの組ませ方も考えなければならない。**

**短所を活かす方法は、隠さないで短所が出てこないようにするんじゃなくて、むしろわざと短所をさらけ出して、「俺の短所はここだ。ダメなところだから、助けてくれないか」と言って、誰かに助けを求める。助けてもらえたら、「君はすごいね。ありがとう。君を雇って良かった。君と出会えてよかった」と褒め称える。これを活人力と言います。自分の短所をさらけ出す勇気のない人間は、本当には人を活かすことも輝かせることもできない。活人力というのは、自分の短所をさらけ出す勇気のある人間が初めて持つことができるものである。感謝と尊敬と恩を感じて、相手の存在を輝かせる。これを獲得するには、仕事をしてもらう、仕事をさせるということを考えていかないといけません。本当に活人力のある人間は、自分の短所をさらけ出す勇気がある。仕事をさせて、その人の力を引き出してあげて、伸ばしてあげて、賞賛してあげて、尊敬してあげる。これが部下を成長させ、部下を活かす、最も大事なやり方であります。**

**よく昔から、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」ということを言われるんですけども、組織においては、地位が上がれば上がるほど大事なことは、自分の短所をさらけ出すことができる実力を身につけなければ、部下は育ちません。上司になると、部下が頼りなく見えてしまって、部下のことを批判したりして、自分でやってしまう。そのことによってかえって上司は自分の責任が重くなってしまって、ノイローゼになってしまう。よく最近、30代のうつなんかも言われています。地位が上がるほどに責任感ばかりが重くなってしまって、部下に仕事をさせる力を身につけないと、自分だけが苦しむことになってしまう。そうならないためには、わざと自分の短所をさらけ出して部下に助けてもらうことによって、仕事をさせてしまう。ほとんどのことを部下にさせる。そのことによって、部下を育てるということを考えていく必要があります。**

**よく助けてあげることは立派でも助けてもらうことは良くないという価値観がこれまでありましたけど、これからはそうじゃなくなる。助けてあげることと助けてもらうことは、同等の価値がある素晴らしい行為だ。助けてあげるだけでは相手を惨めにする。助けてあげたらまた相手から助けてもらう関係性をつくっていく。これがバランスだ。ぜひ地位が上がれば上がるほど、自分の短所をわざとさらけ出して、部下に助けてもらって、部下に仕事をさせて、部下に仕事をしてもらって、そしてそのことを褒め称える。そして尊敬してあげる。感謝してあげる。そういう教育の仕方を上司は覚えていかなければなりません。これが短所というものを最大限に活かす方法論なんです。こういうことを分かってくると、短所というものが決してマイナスのものではないとわかる。短所があることを隠さずに自分でちゃんと自覚することができます。結果として謙虚さが滲み出てくる。その謙虚さが自分を卑屈にさせることなく、謙虚であることに自信が持てる。そういう人間性ができ上がってきます。謙虚にすることによって卑屈になるんじゃなくて、謙虚さが自分の人間としての自信になってくる。そういう形で働き始めるわけであります。**

**人間の本質は心と言われますが、人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは長所ではなく短所。短所がなかったら謙虚な心はつくれない。短所があるだけでは、人間ではない。短所があるだけでは動物。人間になるためには長所と短所を自覚することによって、初めて人間になれる。短所はあるだけでは謙虚な心はつくり出せない。自覚することによって謙虚な心がつくられる。自分の短所を知る、自覚することによって我々は謙虚な心をつくり出すことができる。すなわち人間の本質である謙虚な心をつくってくれるのは短所だ。これが謙虚さがつくられ、体得され、滲み出てくるという構造に持っていく第一番目の原理であります。**

**もうひとつの不完全性の自覚を体得し、肉化させていく原理は、理性がいかに不完全であるかを知ること。これは理性革命だと私は言っているんですけど、今までは理性は完全無欠のロックンローラー…そんな感じで人間は理性というものを信頼して、理性に絶対的な信頼を置いていたのが近代の社会の在り方でした。理性というのは神から人間に与えられた能力であって、人間の持っている能力の中で理性しか信頼できるものはないんだと考えてきました。理性を成長させることが人間を成長させることなんだという形で知育偏重の理性教育がなされてきた。だけども、理性が成長することで結果として、人間性が破壊されて血の通った温かな心が消える、という状態になってしまったのが現実であります。そういうところから理性能力は本当に絶対的に信頼できるものなのかどうか、ということが疑問視されています。特に理性を原理にして生きてきた結果、科学技術文明というのができて、科学的な心理というものを使って我々は自然に対応してきた。そのことによって自然破壊が起こり、環境破壊が起こり、人間性の破壊が起こった。この人間性の破壊の中には離婚の激増や幼児への虐待、高齢者への虐待、そしてちょっとした違いを理由に対立・戦争をして殺し合う…という現実がつくられてしまった。そういうところから本当に我々は理性を信じてこれからも生きていってもいいのか、という疑問が今精神世界においては存在するわけであります。これからも理性を信じて生きていってもいいのか。**

**実際問題、哲学史の中では19世紀中頃から理性批判の哲学というものが出てきまして、実存哲学って言うんですけど。理性能力というものには問題があるんじゃないかということに気づき始めて、理性に対して批判的な思想が出始め、あの有名なジークムント・フロイトの深層心理学がつくられました。それは、理性による人間への支配というものが精神病の原因であったり、いろんな内科的な病気の原因だと。現在では診療内科・精神内科という観点から、あらゆる病気は理性が命を支配し、抑圧することによるものだと考えられてきました。理性がいかに恐ろしいものかを知ることができるようになってきたわけであります。また、1931年には数学者のクルト・ゲーデルが、理性という能力の不完全性を数学的に証明するという論文を発表しました。これを不完全性定理といいます。そうしてだんだんと理性というものがどういう問題点を持っているかということがわかってきました。それからまた1948年か9年ぐらいですけど、アンリ・ベルクソンというフランスの哲学者が、時間と自由という本の中で、理性は生きているものを殺す力であると、非常に激しい理性批判を展開したわけであります。理性によって認識されているものは変化しなくなってしまう。つまり、変化しないというのは死んでいるんだ。生きているということは変化することなんだ。変化しなくさせてしまうとは殺すこと、として理性の問題点を突いたわけであります。そうしてだんだんと、理性に対する絶対的な信頼が揺らぎ始めるという状態になってきた。では我々はこれから理性をどのように理解して使わなければならないのか。人間は理性という能力を持つことによって人間的な生き方ができるわけなんですけど、理性は決して絶対的なものではない。どうすれば我々は理性能力を有効に使って、人間として生きていくことができるのかをこれから考えていかなければならない。これから持たなければならない理性革命、理性に対する意識の変革はどういうことなのか。**

**確かに理性は合理的に考えられる能力なんだけど、だけど理性は合理的にしか考えることができないところに問題点がある。理性は合理的にしか考えることができない。そこに理性の不完全さの根拠があるんだ、ということを我々は知る必要がある。理性は合理的に考えることができる能力なんだけど、だけど理性は合理的にしか考えることができない。そこに理性の問題点がある。合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力である。それは合理的にしか考えられないところに有限性があり、不完全性がある。なぜ不完全だと言わなければならないのか。それは理性だけで考えたならば、理性能力は完全なんですが、人間という観点から理性を捉えた場合には、理性は人間にとって不完全な能力だと言わなければならない。なぜならば、人間は理性ではない。人間は理性と感性と肉体という三つの要素が絡み合って人間という生命をつくっている。理性的に人間の世界を捉えるということは、理性的に人間の世界を歪めてしまうことになるんだ。理性的に何かを認識するということは、あらゆることを理性的・合理的に歪めてしまう。そういう結果になってしまう。そのことによって自然というものも理性的に合理的に対処した結果、自然破壊という状況になった。決して自然は合理的にできているんじゃない。人間の生きている世界は有機体・有機性という世界であって、決して合理性だけが支配をしているんじゃなくて、人間にも感性がありますけど、あらゆる命にも感性がある。感性というのは理屈を超えた世界。感じるってことは理屈抜きの世界。肉体もこれは理屈を超えた世界だ。体験というのは理屈を超えた世界だ。ということは人間というのは理性を超えた、理性的ではない…そういう世界を感性、肉体というふたつの領域において持っている。だから、人間というものを理性のみで理解しようとすれば、人間を理性的に歪めてしまうことになる。だから、理性的な判断が偏見となり、その判断がかえって現実に問題をつくり出してしまうことになってしまう。あの有名な西郷隆盛の偶感という言葉がありますが、漢詩の中でこう言っています。「才子元来多過事　議論畢竟世無功　誰知黙黙不言裡　山是青青花是紅」と。人間はあれこれと議論をするけれども、そんなものは無駄だと。理性であれこそ議論をしてどんな結果を出したとしても、決して結果はうまくいくだけではなく、常にいろんな問題をつくり出してしまう。どんなことにもプラス面、マイナス面がある。いかに議論を重ねてもマイナス面をなくすことはできない。誰が正しい、間違っているということを議論することは無駄。「山是青青花是紅」というのは、山は青い、花は赤いというのは何も言わなくても初めからわかっていること。そういう真実を知る目からすれば、議論をする余地がない。**

**またいろんな意味での実態とか、真実というものは理性ではわからない。だから悟りや座禅、瞑想では考えるなというわけです。まず肉体を使っていろんなことをする。これは真言密教の修験道なんかそうなんですけどね。肉体を使って行動すること、そして感性でつかんだことが悟りなんだ。そういう世界が仏教にはあるわけであります。理性であれこれ言うのはそれは偏見であり、歪みなんだ。なぜかと言えば、どんな立派な人間でも肉体がある限り、今自分の肉体のある場所からしかものは見えないんだ。どんな立派な人間でも今は自分の肉体のある場所でしか判断できないんだ。どんな立派な人間でも肉体がある限りは、その考えには偏りがある。偏見なんだ。誰の考えをとっても正しいと言えるものはない。そういうところから仏教では「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があって、一人ひとりの人間の考えは偏っていて間違っているんだけど、三人の考えを集めれば、我々は仏の中に近づくことができるんだ。大事なことは、自分の立場からものを見ても偏見なんだ。また相手の立場からも見ても偏見なんだ。また第三者の立場から客観的にものを見ても、それも偏見なんだ。客観的にものを見たら正しいと思ってしまっている人が多いんですけど、客観的にものを見るということは、客観的に物事を歪めてしまっているんですよ。だから客観性を追求して真理だと言っている科学が、自然を破壊するということになってしまっている。科学的真理も偏見なんですよ。正しいと思っているかもしれませんが、科学的真理も偏見なんだ。真実は見えてないんだ。本当に我々が真実に近づこうと思ったら、自分の意見と相手の意見と第三者からの客観的な意見とをガッチャマンして、統合して、そして初めて生きた現実が捉えられる、というのが人間的認識の成長のさせ方であります。これを「三人寄れば文殊の知恵」と仏教では言っているわけです。現実の社会というのは、一人称二人称三人称と立場がある。どれも全部偏りがあるんだ。三つの視点を統合することによって、初めて生きた現実を全体として捉えることができる。これが学問的な現実の認識のつくり方なんですね。そういう意味においても、理性には偏りがあるということを我々は良く知らなければならない。客観的に見てもそれは偏見なんだ。人間は偏見から脱却できない。**

**だけども、理性は合理的にしか考えることができない、というのはこれは理性に対するマイナスの評価なんですね。では、理性のプラス面とはなんなのか。それは、理性は嘘が言えるということ。本当のことも言えるんだけど、嘘も言える。嘘を言うとは、事実にないことを言うこと。これはどういうことかと言うと、事実というものは現在と過去しかない。嘘が言えるということは、事実にはない未来に対応できるということ。未来とは、まだ事実になっていない理想を語る、夢を語る、希望を語ることができる。ここに理性の積極的な価値があるんだ。理性には50%、事実に支配されていない、縛られていない力があるんだ。このことが未来に対応できる人間の力をつくってくれている。この力によって我々は歴史をつくってきたんだ。事実じゃないことを語ることができる、この理性能力によって我々は文明・文化をつくり、歴史をつくってきたんだ。理想、理念、夢や希望は「絶対にこうだ」というものではなくて、今よりもより良いものを理想と言う。理性には絶対にこうだと言える力はない。より良いことを考えるにはどうするか。同じ考え方の人と接していたのでは、より良いことは考えられない。楽しいし、気楽だけど成長はしない。成長しようと思ったら自分とは違う価値観、考え方の人間と付き合って、自分とは違う考え方を知って、自分とは違うふたつの考え方を見つけて統合して、自分の考え方を成長させていく。そのことをして我々は、より良いことをつくり出すことができる。ここに理性を人間が支配して、使いこなして生きていく力ができてくるわけです。理性的な意味で謙虚さを体得し、身につけて生きていく方法であります。自分がどんなに正しいと思っても、それは自分だけの考えでは偏見。ふたつを統合させて「三人寄れば文殊の知恵」とし、仏の知恵に近づくということができる。絶対的なものは出てきませんけど、より良いものは出てくる。謙虚さを身につけていくためには、人間は誰でも長所半分短所半分だ。理性は合理的にしか考えることができない、不完全な能力だ。この意識を持ち、自分で深めていかなければならない。また実践をする。そのことによって、だんだんと謙虚さが身について、いかなるときにおいても傲慢にはなれない人間性がつくられていくんじゃないかと思われます。この謙虚さと自信を統合することで現実社会を生き抜く力をものにできる。それぞれひとつだけでは生きられない。謙虚さと自信は一対のものとして表裏にないといけない基本原理だと知ってもらいたいと思います。これは仕事をしていく上で決して忘れてはいけない大事な課題であり、お客さんに対してだけではなくて一緒に働いている仲間との関係においても大事な原理です。とにかく成功と幸せを確実に手に入れようと思ったら、これは最も土台に置かなければならない基本原理だということです。自信と謙虚さは一対のものだ…。というわけで休憩に入りたいと思います。どうもありがとうございました。**